

# INSIGHTOUT

ROUND #7

環境生活者の新モデル



生活総研

# 生活者を主語に、 環境問題の未来を考える。

地球環境問題への取り組みは、いまや、すべての産業カテゴリーに関わる大変重要な社会 이슈ですが、その未来を考える上では、いくつかの視点が存在します。国際間の枠組みづくりの視点、法規制や基準整備といった政策視点、技術革新や企業のCSR視点…。しかし、最も大切な視点は《生活者の視点》ではないでしょうか。【環境】という単語は辞書では「まわりを取り巻く周囲の状態や世界。人間あるいは生物を取り囲み、相互に関係し合って直接・間接に影響を与える外界」と定義されています（デジタル大辞泉より）。すなわち、環境とは人と外界の関係性を意味し、生活者不在では成立しない概念です。生活総研では、そんな《生活者の視点》から、環境問題の未来を考察しました。日本全国、および世界主要7都市での定量調査、日本人生活者の詳細な環境ライフスタイルを探る定性調査を実施。諸外国との比較、属性別の分析、生声の洞察から、日本の環境生活を牽引するモデル（規範）となっていくであろう生活者像を発見しました。キーワードは【グリーンクラス】。地球環境問題を行動の指針として、生活を改善し、新たな幸福の設計を始めている人々の姿をご提言します。

# 1. 日本人の環境国民性

日本全国7,175人、世界主要7都市2,100人の調査結果から、日本の生活者の環境意識・行動の特徴、すなわち《環境国民性》が明らかになりました。日本人は環境先進国と呼ばれる国の都市住民と比べても、高いレベルの地球温暖化への危機感、貢献意欲を持っているようです。しかし、具体的な行動

に移れない、できれば他者にまかせたい、現在の便利な生活を犠牲にできない、そんな未成熟な意識も持ち合わせています。金銭的・肉体的負担を伴う地球環境に配慮した生活と、今まで通りの便利で経済的な生活との間で揺れ動く、エコジレンマを抱えた日本の生活者の姿が浮かびあがってきました。

## ●危機感是世界トップ水準

日本人の90.5%という大多数が「手間やコストをかけても地球環境の保護に貢献したい」と回答しています。経済発展より環境保護を優先すべきと考える人も86.4%を占め、7都市平均を10%以上上回るなど、地球環境への危機感是世界トップ水準のようです。

## ●科学的知識、理解は不足気味

9割以上の日本人が地球温暖化の進行を信じています。しかし、自分がとるべき行動を理解している人は52.8%と半数程度に留まっています。漠然と脅威を感じながらも、問題の本質的な理解はそれほど進んでいません。

## ●環境行動は発展途上

「地球環境に配慮した行動が日常的な習慣になっている」と回答した日本の生活者は53.1%と、海外7都市全体の80.1%に大きく劣ります。日常的な行動の実行率も多くの項目で7都市平均を下回っています。環境行動の習慣化は、まだ発展途上の段階です。

## ●便利な生活は捨てたくない

「地球温暖化防止のために、現在の便利な生活を犠牲にたくない」という回答率は、42.1%。海外7都市全体の28.0%を大きく上回っています。また、「環境に配慮した生活を快適に感じる」人が少ないことも日本の特徴です。世界有数の便利な生活環境に慣れ親しんでいる日本人生活者。環境を優先した生活には負担を感じる人が多いようです。

## ●コスト負担には消極的

約5割の日本人が、環境に配慮した生活は経済的な負担が大きいと感じています。「地球環境に配慮した商品やサービスには余分なお金を支払ってもよい」という回答も海外7都市を10ポイント以上下回る57.5%に留まっています。強い危機感を持ちながらも、まだまだ家計を優先する意識が高く、コストを負担することにはやや消極的なようです。

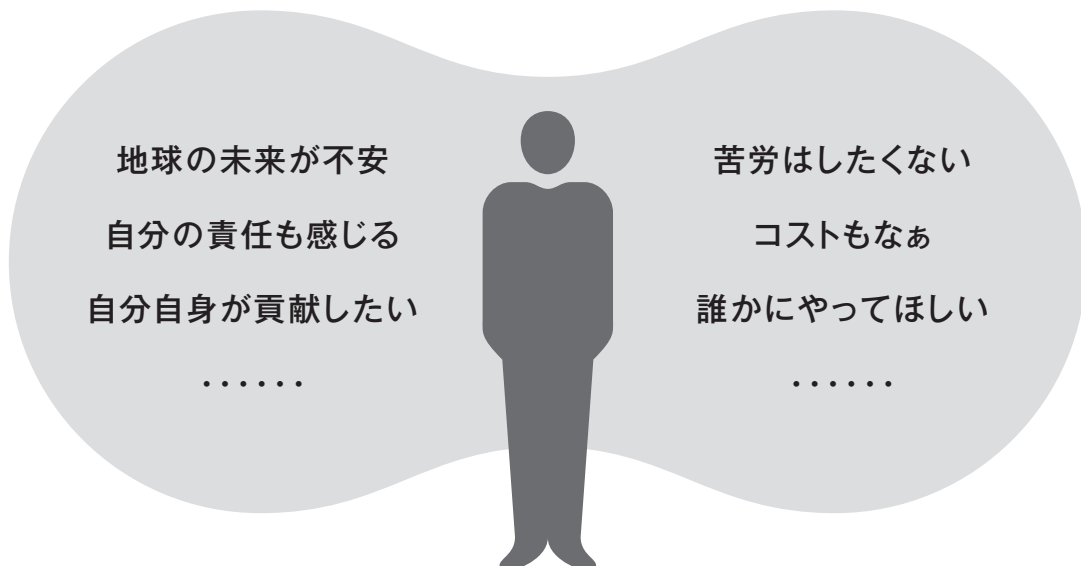
## ●できれば他力に頼りたい

地球温暖化対策は「自分がやりたい」もしくは「他人にやってもらいたい」、この二者択一では日本人の38.9%が他人にやってもらいたいと回答しています。これは海外7都市全体の26.6%を10ポイント以上上回ります。また、市民よりも国が率先して行うべき、自国が先頭に立つよりも他国にまかせるべき、そんな意識が比較的高いことも日本人の特徴です。

## ●男性より女性、若者よりエルダー

日本では男性より女性が、若年層より高齢層が環境保護意識が高い傾向があります。環境に配慮した行動の実行状況も同様の傾向を示します。女性優位は海外も共通ですが、日本では特にその差が顕著です。若年層より高齢層が高いという年齢効果は日本固有です。日本人の環境生活を構造的に理解する際に鍵をにぎるのは、性別と年代のようです。

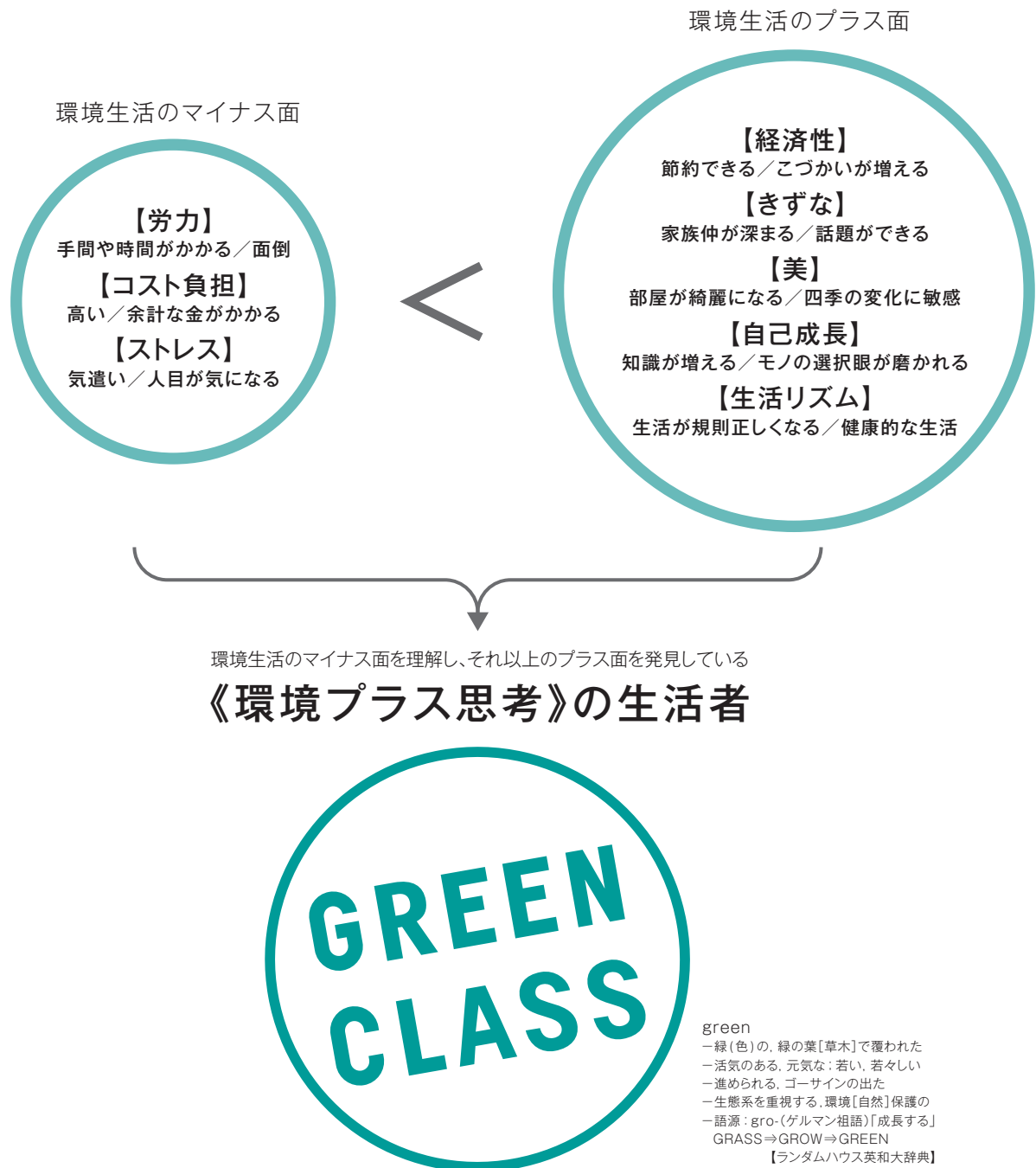
## エコジレンマを抱えた日本人生活者



## 2. 環境生活者の新モデル

地球環境に配慮した生活と経済的で便利な生活との間に揺れ動く日本人の中でも、ジレンマを越えて、環境に配慮した行動が日常習慣化している新しい生活者が生まれつつあります。環境ライフスタイルを詳細に探る定性調査を通じて、生活者が陥っているジレンマの正体、ジレンマ越えのきっかけ、具体的な行動が見えてきました。生活者は近年の環境問題ブームがきっかけで行動をしているわけではなく、5年前、10年前、ものごころついたころから、地道に継続的に環境問題に取り組んでいます。そして、具体的な行動をとっている人はほぼ全員が環境に配慮した行動が自分の

生活にもたらすマイナス面を理解しています。「面倒」「時間がかかる」「値段が高い」「ストレスがたまる」…。そんな声が多数聞こえてきました。しかし、マイナスを理解していると同時に、それ以上のプラスを発見しているようです。「部屋がキレイになった」「節約のおかげで、こづかいが増えた」「子どもと一緒にボランティアが楽しい」「生活が規則正しくなった」「生命や地球に関する知識が深まった」「家族が協力するようになった」…。自分なりのプラスを発見・享受している、そんな地球環境に配慮した生活を《プラス思考》で楽しんでいる新しい生活者【グリーンクラス】の誕生です。



# <http://seikatsusoken.jp/GREENCLASS>

ウェブサイトにて、環境民力調査のデータ、

【グリーンクラス】の詳細説明、関連する過去の生活総研発表資料などをご紹介します。

新たな環境生活者を捉えるナレッジとして、ご活用ください。

## 【調査設計】

### 調査① 環境民力調査

#### 【日本国内編】

- 調査時期：2008年3月-5月
- 調査地域：日本全国
- 調査対象：12歳から69歳までの男女
- 調査方法：インターネット調査
- サンプル数：7,175サンプル

年代	男性	女性
12-15歳	250人	250人
16-19歳	250人	250人
20-29歳	617人	618人
30-39歳	618人	617人
40-49歳	617人	618人
50-59歳	618人	617人
60-69歳	617人	618人
合計	3,587人	3,588人

#### 【海外編】

- 調査時期：2008年3月
- 調査都市：ニューヨーク、トロント、ロンドン、パリ、フランクフルト、ミラノ、モスクワ
- 調査対象：20歳から59歳までの男女
- 調査方法：インターネット調査
- サンプル数：各都市300サンプル、計2,100サンプル

年代	各都市共通	
	男性	女性
20-39歳	75人	75人
40-59歳	75人	75人
合計	150人	150人

### 調査② 環境ライフスタイル調査

- 調査地域：首都40km圏
- 調査対象：18歳から74歳までの男女
- サンプル数：317人
- サンプリング：生活総研オリジナル調査パネル【生活発見パートナーズ】より抽出
- 調査方法：郵送自記入法
- 調査時期：2008年5月-6月

# INSIGHTOUT

ROUND #7

## 生活総研

嶋本達嗣

高橋哲久

夏山明美

山本貴代

南部哲宏

吉川昌孝

古澤直木

笥 裕介

斎藤竜太

平澤広子

関沢英彦

藤原まり子

デザイン

松本哲治

株式会社ASTRAKHAN

校閲

株式会社円水社

印刷

日経印刷株式会社

2008年7月24日 発行

通巻8号

発行人

嶋本達嗣

発行所

株式会社博報堂

編集所

博報堂生活総合研究所

東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー

〒107-6322

tel.(03)6441-6450

<http://seikatsusoken.jp/>

Copyright 2008

Hakuhodo Institute of Life and Living.

Hakuhodo Inc.

All rights reserved

Printed in Japan